

小学校 社会科 部会

部会長名 添田町立添田小学校 校長 高上 克也
実践者名 香春町立採銅所小学校 教諭 西本 直

1 研究主題及び副主題

思考力・判断力・表現力を育む社会科指導のあり方
～単元のねらいに迫る体験活動の設定による言語活動の充実を通して～

2 主題設定の理由

(1) 社会の要請から

現在、私たちが生きる社会は変化の激しい世の中であると言ってよい。世界の状況を見れば、今後、大きな社会構造の変化が起こると考えられる。世界人口の増加にともない今までの大量生産・大量消費・大量廃棄型社会では有限である地球資源に与える負荷が大きすぎるため、さらなる発展を望むことができない。これに変わる社会構造として持続可能な社会の創造を行う必要がある。そのために、これまで蓄積してきた知識や技術を最大限に活用し、競争力の向上や技術革新に積極的に取り組んでいく「知識基盤社会」と言われる社会への移行が求められくる。このような社会を生きていくには幅広い知識と柔軟な思考力に基づく新しい知や価値を創造する能力が必要となる。

また、グローバル化が年々加速し他国との激しい経済競争や親密な国際連携を避けては国際社会の中で生きていくことが難しい時代になってきている。このことは、異文化交流を促進したり異文化理解したりするコミュニケーション能力も必要になってくることを意味している。

そして、我が国の児童・生徒の学習に関する実態は、国際的な学習到達度調査であるOECD学習到達度調査（PISA）やI E A 国際数学・理科教育動向調査（T I M S S）等から読解力や学年が上がるにつれて低下している理数科における興味・関心といった課題が明らかになってきている。

(2) 学習指導要領の趣旨から

現行の学習指導要領では、「生きる力」をはぐくむという理念のもと、知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力などの育成を重視している。また、言語（言語活動）や理数の力などをはぐくむための教育内容を充実させ、授業時数も増加させている。

また、各教科等の指導に当たっては、体験的な学習や基礎的・基本的な知識及び技能を活用した問題解決的な学習を重視するとともに、児童の興味・関心を生かし、自主的、自発的な学習が促されるよう工夫することが求められている。さらに、「生きる力」をはぐくむためには、学校・家庭・地域が相互に連携しつつ、社会全体で取り組むことが不可欠であるという観点から、地域や学校の実態等に応じ、家庭や地域の人々の協力を

得るなど家庭や地域社会との連携を深めることを求めている。

3 主題の意味

(1) 「思考力・判断力・表現力を育む」とは

人が直面した問題を解決するときに使う力で、「現状や過去の経験などから様々な情報を取り出して関係づけて考える力」「情報の軽重や関係づけ方の正否などを判断する力」「思考・判断した結果を相手に分かるように表現したり、考えを練り合ってよりよい考えに高めたりする力」を育むことである。

(2) 「単元のねらいに迫る体験活動の設定による言語活動の充実を通して」

授業で単元の目標を設定し、単元における目標を達成させることをめざすものでありこのねらいに迫るために児童の興味関心をかき立てるような体験活動を仕組むことをさしている。体験活動の内容としては、見学したり地域の方の話を聞いたり何かを作ったりと多様な活動の設定を考える。

また、「言語活動の充実」とは、(1) 体験から感じ取ったことを表現する。(2) 事実を正確に理解し伝達する。(3) 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする。(4) 情報を分析・評価し、論述する。(5) 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する。(6) 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。

これらの活動を授業のねらいと照らし合わせながら取り入れ、充実させていくことである。

4 研究の計画（授業の計画）

(1) 単元名 大単元「わたしたちの県のまちづくり」

小単元「焼き物を生かしたまちづくり」

(2) 単元観

① 教材観

本小単元は、学習指導要領第3学年及び第4学年の目標(2)(3)を受け(6)のウとの関連の上に設定したものである。

1 目標

(2) 地域の地理的環境、人々の生活の変化や地域の発展につくした先人の働きについて理解できるようにし、地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする。

(3) 地域における社会的事象を観察、調査するとともに、地図や各種の具体的資料を効果的に活用し、地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする。

2 内容

(6) 県(都、道、府)の様子について、次のことを資料を活用したり白地図にまとめたりして調べ、県(都、道、府)の特色を考えるようにする。

本小单元では、こうした目標及び内容を受けて、県内の特色ある地域として東峰村の小石原焼を取り上げる。東峰村の人々の生活を調べることを通して、焼き物を生かして町を盛り上げようとしている思いや工夫について理解を持てるようにすることをねらいとしている。

小石原焼は、もともと高取焼と小石原焼の流れをくむ50余りの窯元が操業し、民陶の里として知られていた。東峰村の人口は約3000人、面積は約29k㎡であり、全体の半分以上が山林となっている。1975年には通産省（現在：経産省）より陶磁器としては、日本最初の「伝統工芸品」に指定され、知名度が上がった。現在は、洗練された優美な風格を伝える茶陶の高取焼と、「飛びかんな」「刷毛目」「打ち掛け」などの独特の装飾技法を伝える民陶の小石原焼が両立し、現在では約50軒の窯元がある。本小单元では、このような小石原焼の特色や歴史を理解すること、また、陶芸人として技術を身につけ受け継いできた職人の工夫や努力に気づくことをねらいとしている。

② 児童観

本学級の児童は社会科が「好き」と回答している児童は15名中7名である。「どちらかといえば好き」5名、「どちらかといえば嫌い」2名、「嫌い」1名である。社会科の学習で自分の考えを書くこと・話すことが「好き」な児童は14名で「嫌い」が1名である。嫌いな理由として「書き方・話し方が分からない」「はずかしい」である。みんなで考えたり話し合ったりすることが「好き」な児童が15名である。資料やインターネットから自分で調べることが「好き」13名、見学に行ったり体験したりすることが「好き」15名、専門家などから話を聞くことが「好き」4名、調べたり見学したりしたことを新聞にまとめることが「好き」8名である。また、アンケートで「福岡のよいところ（自慢できるところ）」を記述させたところ「めんたいこ」3名「めんべい」1名であった。「香春のよいところ（自慢できるところ）」は、「竹の子」3名、「自然が豊か」2名、「猿がでる」・「柿」「銅が採れた」「やさしい人が多い」1名である。「福岡の伝統工芸品で知っているもの」は、「博多人形」4名だった。上記のような実態から東峰村や小石原焼について具体的なイメージとして持っている児童はいない。また、小石原焼が身の回りの様々なところで使用されていることに気づいている児童は少ないものと思われる。

児童は、単元「昔から今へと続くまちづくり」や総合的な学習の時間を通して伝統文化を身近に感じ生活の中で意識してきた。東峰村の歴史や、小石原焼が日本の伝統的工芸品の1つだということに気づかせながら学習を進めていくことで、児童の知的な好奇心を刺激し、地域とそこで生活する人への関心・愛着を高めていきたい。

③ 指導観

グローバル化が進む現在において自分の国だけでなく他の国も尊重する態度が必要である。そのためには、まず自分の国の愛国心を持たなければならない。愛国心の

もとは、郷土愛がある。発達段階から考えて、中学年の児童にはまず郷土愛を育てていきたい。郷土愛を育てていくための社会科の授業とは、自分の住んでいる地域の特徴、良さ、素晴らしさ、誇るべき伝統を伝え、自分の住んでいる地域を好きにさせる授業だと考える。そこで、本小单元においては以下の点に留意して指導にあたっていきたい。

本小单元の「つかむ」段階では、東峰村の人口や面積など簡単な情報について触れ、小石原焼に興味・関心を持ち小单元を通した学習問題を設定させる。

「ふかめる」段階では、「つかむ」段階で得た、課題を解決していくために、「小石原の歴史」「作業工程」「職人の工夫や努力」「職人の願い」等を教科書・パンフレット・窯元への見学を通して情報収集させる。窯元見学では「マルダイ窯15代目の太田成喜さん」に協力依頼をした。東峰村や、窯元の見学を通して、太田さんが、伝統を受け継ぎ守り生かそうとしていることについて、まとめることができるようにさせる。

「いかす」段階では、多くの情報から自分の課題に適切なものを取捨選択させ、自分の言葉でまとめ、小石原焼のよさを伝える新聞をつくらせる。

(3) 小单元の目標及び指導計画

小 単 元	焼き物を生かしたまちづくり	総時数	9 時間	時期	1 1 月
単元の目標	<ul style="list-style-type: none"> ○ 小石原焼に関心を持ち、作り方やそれに携わり伝統を受け継ぎ守り生かす人の努力や工夫を意欲的に調べようとすることができる。 (社会的事象への関心・意欲・態度) ○ 東峰村で小石原焼が土地条件を生かし昔から作られたことやそれに携わる人が伝統を受け継ぎ生かそうとしていることを考えることができる。 (社会的な思考・判断・表現) ○ 小石原焼の特色やよさ、それに携わる人の努力・工夫について表や絵図にして新聞にまとめることができる。 (観察・資料活用の技能) ○ 小石原焼を東峰村で作るようになったわけや、これからも伝統を受け継ぎ守り生かそうとしていることがわかる。 (社会的事象についての知識・理解) 				
段階	時	学 習 活 動 ・ 内 容		教 師 の 支 援	
つ か む	1 本 時	○ 小石原焼に興味・関心をもち、調べる学習課題を設定し、調べる計画を立てる。		・小石原焼の製品を見せ調べようという意欲を持たせる。	
ふ か め る	2	○ 東峰村の土地条件を生かし、昔からの技術を受け継ぎ小石原焼が盛んになったことを考える。		・教科書、パンフレット、インターネットなどを活用して調べさせる。	
	3	○ 小石原焼が製品になるまでの作り方について調べ、職人の優れた技に着目しながらまとめる。		・資料では分からなかったことや質問したいことを整理さ	

め る	4	○ 小石原焼について、資料をもとに調べたり見学の準備をしたりする。	せる。
	5	○ 窯元を見学し、小石原焼について調べたり	・調べたいことについて目的意識を持ってインタビューさせる。
	6	・体験したり質問したりする。	
	7	○ 太田さんが技を受け継ぎ身に付けるための工夫や努力を調べ、考える。	・「作る」「売る」「広げる」の観点ごとにまとめることにより、工夫や努力について考えさせる。
8	○ 小石原焼を守り生かそうとする太田さんの願いを考える。		
い か す	9	○ 小石原焼の学習を生かし小石原焼のよさを伝える新聞を作る。	・太田さんの技、工夫、努力についてまとめさせる。

5 指導の実際

(1) 主眼

民陶むら祭りの様子や、東峰村までの道のりの写真を読み取り、小石原焼や東峰村について調べる学習課題を設定することができる。

(2) 準備

教師：小石原焼、写真、民陶むら祭りのパンフレット、課題を書く短冊

児童：教科書、ノート

(3) 展開

段階	学 習 活 動	指導上の留意点・支援
導 入 展	1 東峰村の位置や人口を知り、どのような場所か考える。	○ めあてにつなげるために、東峰村の情報を教える。
	2 本時の学習のめあてを知る。 東峰村の写真を見て、気づいたことやきになることを出し合おう。	
	3 飯塚市から東峰村に行くまでの写真を数枚見て、東峰村がどのような場所にあるのか考える	○ 周りが山に囲まれていることや、香春町や飯塚市から遠く離れていることに気づかせる。
	4 普段の写真と民陶むら祭りの写真を見比べて、気づいたことを出し合う。 ・「人も車も多いな。どうし	○ 民陶むら祭りの際には、たくさんの人が集まることが分かるように、祭りが行われていない普段の写真も用意し、比較できるようにする。

開	<p>てだろ。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「何か買っている人がいるよ。」 ・「陶という文字がたくさんあるね。」 	
	5 民陶むら祭りは、小石原焼のために、人が集まっていることを知る。	○ 「陶」という文字は、焼き物を意味していることを教える。
終	6 これから調べたいことを出し合い学習課題へつなげる。	○ 調べること、調べ方について話し合い、学習の見通しを持たせる。
末	<ul style="list-style-type: none"> ・「民陶むら祭りの様子をもっと調べたいな。」 ・「小石原焼がどのように作られているか調べたいな。」 	
	7 次時学習の予告を聞く。	○ 次時につなげるために、小石原焼を見せ、模様の付け方や、どのような制作手順か疑問を持たせる。

6 授業の考察

授業の導入段階では、終末で東峰村や小石原焼きの課題をたくさん出せなかったため、必要最低限の情報しか教えなかった。その中で地図も見せたが、東峰村の大まかな場所しか載っていなかったため、位置関係が捉えにくかった。地図帳を使ったり、香春町がどこにあるか考えさせたりすれば、東峰村への関心が高まっていたと考えられる。

展開段階では、飯塚市から東峰村に行くまでの道のりを写真で見せ、どのような場所か捉えさせるようにした。写真には意図的に案内標識や窯元の看板の写真を見せ、「窯」という文字や「陶」からどのような場所なのか連想できるようにした。児童からは、皿やコップで有名な場所ではないかという意見が出ていた。さらに、教科書に載っている民陶村祭りの時の様子と、事前に調査したときの閑散としているときの写真を見せ、違いを比べさせた。

<写真1 閑散としている様子>



<写真2 民陶村祭りの様子>



< 児童の意見 >

- ・人や車が多い。
- ・のぼり（はた）までたっている。
- ・駐車場が満車になっている。
- ・何かの祭りではないだろうか。

ここで、効果的だったのは、教科書の民陶村祭りの様子を見せるのではなく、閑散としている様子の写真と比べさせることで、人が集まる魅力が東峰村にあるのではないかと児童に理解させることができたことだ。

< 写真3 児童の課題 >

その後、民陶村祭りのポスターを見せ、小石原焼という陶器のために集まっていることを知らせ、終末へとつなげた。終末では、東峰村や小石原焼について調べたいことを短冊にかき、黒板にはっていった。思っていた以上に課題がたくさん出たので、グルーピングはできなかったが、非常に意欲が高められた導入になったと考えられる。



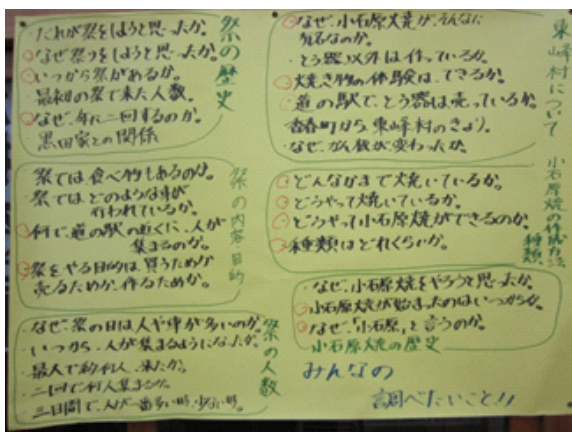
7 成果と今後の課題

< 成果 >

- 事前に教師が調査を行う事で、児童に考えさせたいことや、理解させたいことを整理することができた。「飛びかんな」や「打ち掛け」の作成方法などは、実際に見に行くことで、児童にも説明することができた。
- 実際に東峰村に見学に行くことで、様子や生活の様子を捉え、窯元見学で、職人の苦労や願いを知ることができた。
- 実際に作った物や小石原焼を見せることで、陶器の良さや、感触をつかませることができ、体験的活動を行うことができた。
- 「つかむ」段階で課題を児童からたくさん出させることで、その課題を解決したい、調べたいという関心意欲を高めることができた。また、見学に行き、最後に新聞にまとめる段階の時まで、意欲を継続することができた。

< 写真4 グルーピングされた課題 >

< 写真5 飛びかんな体験 >



<課題>

- 今回の単元で、写真をたくさん使ったが、児童が見やすいように配ったり、テレビに映し出して大きく見せたりしてあげる必要があった。
- 課題を出すところまではできたが、グルーピングができず、児童が交流する時間も確保できなかった。グルーピングは教師がした。

◎ 参考文献

- ・小石原 やきものの歩み（小石原焼陶器協同組合）
- ・東峰村 観光ガイドブック（東峰村役場・企画振興課）
- ・もっと知ろう小石原焼（つちのこ会）